

地域包括ケアを担う医療従事者を対象とした 感染症対策研修会の有効性と課題

吹田夕起子¹⁾ 福井 幸子²⁾ 矢野 久子³⁾
前田ひとみ⁴⁾ 細川 満子²⁾

The validity and issues arising from the infection control workshop for health care workers in Integrated Community Care

Yukiko SUITA¹⁾, Sachiko FUKUI²⁾, Hisako YANO³⁾,
Hitomi MAEDA⁴⁾, Mitsuko HOSOKAWA²⁾

要旨：地域包括ケアを担う医療関係者が、地域で発生する感染症の実態と予防策を理解し、自施設での感染症対策に役立てることをねらいとして2日間の感染症対策研修会を企画・実施した。本稿ではその研修会の有効性と課題について検討する。訪問看護ステーション、診療所、高齢者施設の延べ70名の研修参加者に対し、研修終了後に質問紙調査を行った結果、58名から回答を得た。受講目的は「感染症対策の最新の知識や正しい知識の習得」が多く、職場における感染予防上の問題は「手指衛生、標準予防策の不徹底」や「針廃棄方法の危険性」等であった。感染症対策研修会について、役立ったと回答した者は96.6%で、感染症に対する知識の習得や針刺し予防対策、標準予防策の再認識の機会となっていた。“職場で活かせる”、“感染管理の情報が得られにくいので今回のような研修会を行ってほしい”等の記述があったことから本研修会の有効性が示唆された。しかし、看護職者の中には、介護職者の感染予防行動や意識の低さに危機感を示した者もあり、今後対象者別の研修について検討する必要がある。

キーワード：地域包括ケア、感染症対策研修会、医療従事者

Key words : Integrated Community Care, infection control workshop, health care workers

1) 日本赤十字秋田看護大学 2) 青森県立保健大学 3) 名古屋市立大学 4) 熊本大学

1) Japanese Red Cross Akita College of Nursing

2) Aomori University of Health and Welfare

3) Nagoya City University

4) Kumamoto University

I. はじめに

近年、我が国では住み慣れた地域で自分らしい暮らしを人生の最後まで続けることができるよう、医療や介護のみならず、住まい、介護予防、生活支援が一体的に提供される地域包括ケアシステム(以下、地域包括ケア)の構築を推進している。療養環境の安全を図り、充実した在宅医療・ケアの推進をするうえで訪問看護ステーション(以下、ST)や診療所、介護老人福祉施設・介護老人保健施設(以下、高齢者施設)における医療従事者の役割は重要であるが、医療従事者自身の安全が図られないと役割は果たせない。

我々がST、診療所、高齢者施設の看護責任者を対象に行った感染対策に関するインタビュー調査では、針刺しの要因としてST、診療所、高齢者施設に共通していたのは、「携帯用廃棄容器の不備」で、コストと容器の形状による問題で購入・持参が困難なため、使用済み針をリキャップしていた実態があった。STでは「医療機関への遠慮で感染症の確認困難」や「家族による危険な抜針」等の課題も挙げられた(福井, 吹田, 細川, 矢野, 前田, 2013)。前崎, 松本, 山崎, 山口, 岡(2006)が社会福祉施設および医療施設の感染対策について調査した結果では、職員に対するB型およびC型肝炎の抗体検査に関しては有床診療所や病院等の医療機関では高率であったが、特別養護老人ホームや介護老人保健施設では半数の施設で実施されていなかった。さらに、抗体陰性者に対するB型肝炎ワクチンの接種は特別養護老人ホーム9%、介護老人保健施設14%と極めて限られていた。小規模病院、診療所における感染対策の現状では、有床診療所・無床診療所では感染症対策に関する職員研修会に「あまり参加できていない」割合が3割と多く、「手指衛生を実施していない」の回答も1割みられた(境, 長谷, 吉井, 2010)。また、高齢者施設における利用者から職員への職業感染では、ノロウイルス感染症や疥癬、結核等の発生が報告されており、標準予防策の徹底が不十分であることや職員の感染対策に対する認識の違い、介護職員への教育に課題があることが指摘されている(吹田, 福井, 細川, 矢野, 前田, 2013)。

これらの現状から、STや診療所、高齢者施設等では針刺しなどの職業感染の危険性がみられ、その背景として組織的な感染対策が困難であることが考えられた。地域包括ケア対象者が感染症を

発症した場合、感染拡大が問題となるため、施設の特徴に応じた有効な感染対策を推進していくことが必要となる。

本稿では、地域包括ケアを担うST、診療所、高齢者施設の医療従事者を対象に感染症対策研修会を企画・開催し、その有効性と課題について検討したので報告する。

II. 研究目的

地域包括ケアを担う医療従事者を対象とした感染症対策研修会の有効性と課題について検討する。

III. 感染症対策研修会の概要

1. ねらい

地域包括ケアを担う医療関係者が、地域で発生する感染症の実態と予防策を理解し、自施設での感染症対策に役立てる。

2. 対象

X県内Y市内の診療所(194カ所)、X県内のST(89カ所)・高齢者施設(166カ所)に勤務する医療従事者

3. 日時

2013年(平成25年)8月24日(土)、9月7日(土)

4. 場所

Z大学講義室

5. プログラム

地域包括ケアを担う医療従事者が研修会に参加しやすいように、研修日を土曜日に設定し、2回に分けたプログラムとし、郵送で案内した(表1)。研修会の内容は地域で発生している感染症の実態と対策、各施設の特徴を踏まえた感染管理の実態と課題、職業感染予防等で、講義に加えて、針刺し予防の演習を組み入れた(写真参照)。講師はICD(インフェクションコントロールドクター)と認定看護師等の感染管理のエキスパート4名であった。

IV. 研修会終了後の質問紙調査

1. 対象者

感染症対策研修会参加者

表1 感染症対策研修会のプログラム

期 日	時 間	テ ー マ ・ 内 容
< 1 回目 > 平成25年 8 月 24 日(土)	10:00～ 10:30	「訪問看護事業所とかかりつけ医の連携における感染予防上の課題と対策」質問紙調査中間報告
	10:30～ 12:00	在宅ケアにおける感染予防－標準予防策－ ・在宅サービスで発生する感染リスクの実態と予防方法、廃棄物処理上の実態と課題
	13:00～ 14:30	針刺し予防（演習） ・安全装置付き翼状針・留置針・ビューバー針の使用の実演他
	14:40～ 16:10	地域における感染症と予防－多剤耐性菌とHIV感染症を中心に－
	16:10～ 16:30	意見交換
< 2 回目 > 平成25年 9 月 7 日(土)	13:00～ 14:30	病院・訪問看護・老人施設の特徴を踏まえた感染管理の実態と課題
	14:40～ 16:40	安全な地域包括ケアを推進していくために ・病院における感染症の動向と取り組み、地域で発生している感染症の実態と対策他



写真1 安全装置付き翼状針の操作



写真2 ビューバー針の使用法

2. 方 法

1回目と2回目の研修終了後、研修参加者に対し、受講目的、職場における感染予防上の問題、役立った研修内容等について質問紙調査を行った(表2)。質問紙の回収は、受付に設置した回収箱に各自で入れてもらう方法で行った。

3. 分 析

質問紙の内容を項目ごとに単純集計し、記述内容は類似した内容ごとにまとめた。

4. 倫理的配慮

対象者には、本研修会と本調査の趣旨・内容を説明した上で、得られた結果は報告書等で公表すること、質問紙調査は無記名で、個人が特定されないこと、調査協力は自由意思であること等を口頭で説明し、質問紙の回収をもって同意とみなした。

V. 結 果

研修参加者は1回目34名、2回目36名で研修参加者延べ70名中58名から回答を得た(回収率82.9%)。回答者は1回目28名(回収率82.4%)、

表2 質問紙の内容

地域包括ケアを担う医療従事者を対象とした感染症対策の研修会 アンケート

いつの受講か○で囲んでください。両日参加した方は両方に○で囲んでください。(8月24日・ 9月7日)

1. あなたの勤務先を○で囲んでください。
 ①診療所 ②訪問看護ステーション ③介護老人福祉施設
 ④介護老人保健施設 ⑤その他の老人施設 ⑥その他 ()

2. 今回の研修を受講した目的を具体的に教えてください。(両日参加者へ。前回と同じでしたら記載不要です。)

3. あなたの職場で抱えている感染予防上の問題がありましたら具体的に教えてください。(両日参加者へ。前回と同じでしたら記載不要です。)

4. 本日の研修は役立ちましたか。○で囲んでください。
 ①はい ②いいえ

5. 4. で「①はい」と答えた方へ。本日の研修で役立った内容について具体的に教えてください。

6. 本日の研修で学んだことをどのように活用しようと思えますか?具体的に教えてください。

7. 4. で「②いいえ」と答えた方へ。どのような研修会の内容を求めますか?具体的に教えてください。

8. 両日参加した方へ。2日間の研修を終えての感想を書いてください。(プログラムに入れてほしい内容がありましたらお知らせください。)

2回目30名(回収率83.3%)であった。研修参加については、2日間参加した者が15名、1回目のみが13名、2回目のみが15名であった。回答者の勤務先はST21名(36.2%)、診療所12名(20.7%)、高齢者施設22名(37.9%)、その他・不明3名(5.2%)であった。回答者の職種は看護職が57名、介護職が1名であった。

研修会の受講目的は、41件の記述のうち「感染症対策の最新の知識や正しい知識の習得」が29件と最も多く、ST・診療所・高齢者施設の3施設に共通していた。他には「職場での感染対策や職員教育の参考にするため」6件、「興味・関心」4件、「業務命令」2件であった。

職場における感染予防上の問題は「手指衛生、標準予防策の不徹底」や「針廃棄方法の危険性」等であった(表3)。診療所では“スタッフの大半がリキャップをしている”、“ポート等新しい技術の対応が必要となっているが、未経験なことが多く、取り扱いに戸惑う点がある”等の記述があった。STでは“針刺し防止安全機構付きの器材はコストが高いため診療所は購入してくれない”、“針の廃棄の仕方等危険管理に対する意識の

低さ”、“介護度が高い(者への)訪問が増えていく中で、STとしてどこまで感染対策に取り組んでいけばよいのか”等の記述があった。高齢者施設では“手洗いもきちんとできていない”、“正しい予防対策が浸透していない”、“介護職の感染症に対する知識がない、間違った理解をしている”、“介護職の感染症対策への取り組みの低さ”、“飛沫感染(者)の徘徊(認知症・ストレス)による

表3 職場における感染予防上の問題

施設	内容
診療所	<ul style="list-style-type: none"> ・針廃棄方法の危険性 ・ポートなど新しい技術の対応への戸惑い
ST	<ul style="list-style-type: none"> ・手指衛生・標準予防策の不徹底 ・針廃棄方法の危険性 ・在宅での曖昧な感染予防対策 ・コストを考えた感染対策
高齢者施設	<ul style="list-style-type: none"> ・手指衛生・標準予防策の不徹底 ・介護職の感染症に対する知識不足 ・感染予防に対する意識の低さ ・利用者からの感染拡大の危険

感染拡大”等の記述があった。

本日の研修は役立ちましたかの設問に「はい」と回答した者は56名(96.6%)で、「いいえ」1名(1.7%)、「無回答」1名(1.7%)であった(図1)。「いいえ」と回答した者は、“看護職としてはとても勉強になった。研修に来てよかったが、介護職を対象とした感染症についての講義が必要(感染

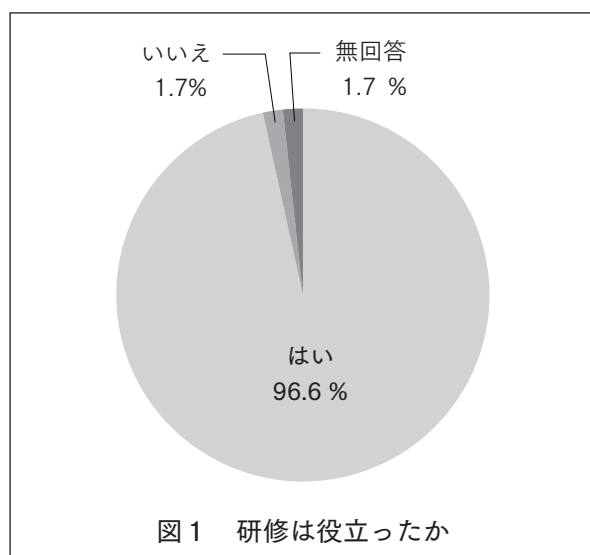


図1 研修は役立ったか

源、感染ルート)”との意見であった。

役立った具体的内容を施設別でみると、診療所では「感染症に関する知識」、STと高齢者施設では「消毒薬や針刺し予防」等であった。「手指衛生の重要性」については3施設とも役立った内容

表4 研修会で役立った内容

施設	役立った内容
診療所	<ul style="list-style-type: none"> 結核、MRSAの講義 ノロウイルス、インフルエンザ、結核等の感染症の講義 耐性菌をもつ高齢者の在宅でのチェックポイント 手指衛生の重要性
ST	<ul style="list-style-type: none"> 消毒の大切さ、消毒薬の取扱い 針刺し対策 標準予防策、手指衛生の重要性 ウイルス、細菌の知識
高齢者施設	<ul style="list-style-type: none"> 針刺し予防の重要性 安全装置付き器材の取り扱い 感染対策に必要な物品の整備 消毒薬の正しい知識 標準予防策の重要性、手指衛生の重要性 感染管理

に挙げられていた(表4)。

研修で学んだことの活用については、「職員への伝達」、「施設内研修に活かす」、「感染対策について職員と話し合う」などが挙げられていた。診療所では“スタッフの感染予防に対する意識改革と訪問看護事業所との連携を密にするように努めていきたい”、“針刺し事故や感染についての正しい知識・現状をスタッフに周知し、皆で対策の見直しをしていこうと思う”等の記述があった。STでは“他のスタッフへも伝えていきたい。意識付けできるようにすることが大切だと思う”、“訪問看護として在宅のお客様に関わることにより、感染を最低限に押さえることができること、いろいろ工夫することができることがわかったので、活かしていこうと思う”等の記述があった。高齢者施設では、“施設での研修に役立てていきたい”、“全てのマニュアル作り、見直しの徹底を行っていく”等の記述があった。

2日間研修に参加した者からは、プログラムについて“とても充実していて、大変役に立った”、“研修はとてもわかりやすく、今後に役立てることができると思う”、“地域包括ケアを担う医療従事者向けの感染対策ということで、こういう学習会はあまりないので、職場の中で活かすことができると思う”、“感染管理の情報が得られにくいので今回のような研修を行ってほしい”等の記述があった。

VI. 考察

地域包括ケアを担う医療従事者を対象とした感染症対策研修会については、「感染症対策の最新の知識や正しい知識の習得」を受講目的として参加した者が多く、研修終了後の質問紙調査では96.6%が研修が役立ったと回答していた。役立った具体的内容では、診療所では結核、MRSA (methicillin-resistant *Staphylococcus aureus*)、ノロウイルス感染症、インフルエンザなどの「感染症に関する知識」、STと高齢者施設では「消毒薬や針刺し予防」等であった。有料・無床診療所では感染対策の職員研修会の参加状況や感染対策の改善策の実施が病院や高齢者施設に比べて低い状況(境ら, 2010)でもあり、今回の研修により病原微生物の理解や感染経路、感染症の特徴、感染管理等「感染症に対する知識の習得」につながったのではないかと考える。「手指衛生や標準予防策の重要性」については、3施設ともに役立った

内容に挙げられていた。感染予防の基本は手指衛生ではあるが、研修を通して「手指衛生や標準予防策の重要性」の認識が高まったのではないかと考える。針刺し予防の演習では安全装置付き翼状針・留置針・ヒューバー針の使用の実演などを行った。研修参加者の中には安全装置付きの器材を使用した経験がない看護職者もおり、「針刺し予防の重要性、いろいろな新しい針をみることで参考になった」、針刺しに対して少し甘い考えを持っていた。予防と対策をしっかりと考えていきたい”などの記述から実際に器材を見て、触れて、刺入を体験することで、針刺し予防に対する意識付けや、安全装置付き器材など感染対策に必要な物品の整備について考える機会になったのではないかと考える。

また、本研修は地域包括ケアを担うST、診療所、高齢者施設の医療従事者を対象としたが、研修を通してそれぞれの職場における感染予防上の問題を共有する機会にもなったと思われる。診療所からは“スタッフの感染予防に対する意識改革と訪問看護事業所との連携を密にするように努めたい”、STからは“有料ホームで働く介護スタッフさんがよく咳、くしゃみ等をするが、マスク等や手洗いの大事なことを教えたい”などの記述もあり、施設相互の連携や感染対策についての地域ネットワークにもつながる内容であったのではないかと考える。さらに、研修会講師は、研究メンバーを含めたICD（インфекションコントロールクター）と認定看護師等の感染管理のエキスパートであったことから、感染症の基本的知識から各施設の特徴に応じた感染対策、最新の感染管理までを学習することができたと思われる。研修参加者から“とてもわかりやすかった”、“職場で活かせる”、“感染管理の情報が得られにくいので、どんどん今回のような研修を行って欲しい”、“もっと多くの人にこの研修を受けて欲しかった”等の記述があったことから本研修会の有効性が示唆された。

一方で、介護職者の感染予防行動や意識の低さに危機感を示す記述もあった。研修参加者からは高齢者施設の職場における感染予防上の問題として、「手指衛生・標準予防策の不徹底」、「介護職の感染症に対する知識不足」、危機感が薄い、職員の意識が統一されていない、感染対策が流行時期的なものになりがちといった「感染予防に対する意識の低さ」、徘徊や自ら感染予防行動がとれ

ない等の「利用者からの感染拡大の危険」が挙げられていた。岡本、松田（2010）は高齢者ケアを担う看護者は、適切な感染予防策を行おうとしながらも、多忙さ、不十分な設備や組織体制によって阻まれることにジレンマを生じさせており、さらに感染症予防への責任の認識や教育背景による知識の違いから、個人の行動に差が生じていることにもジレンマを抱いていたと述べている。また、認知機能の低下した高齢者から感染予防の協力を得ることができず、予防策としての隔離が身体拘束になりかねないことから、感染の拡大のリスクと人権擁護との間で、現行の予防策に困惑していたとも述べている。高齢者施設ではインフルエンザやノロウイルス感染症対策などの研修会を毎年実施しているところが多いが、時期的なものになりやすく、介護職者の感染症に対する知識不足や手指衛生・標準予防策の不徹底が多く施設で問題として挙げられている。さらに、認知機能が低下した高齢者が多く、十分な感染予防行動がとれないことから、看護・介護職をはじめとした全職種が感染予防について理解し、予防対策を講じていくことが重要だといえる。

現在の日本の感染症対策のベースとなっている標準予防策（スタンダードプリコーション）は1996年にCDC（米国疾病管理予防センター）で公開されたものであり、日本では2005年の医療法施行規則の一部改正、2005年2月の厚生労働省医政局指導課長通知「医療施設における院内感染の防止について」で標準予防策の実施が掲げられている。高齢者施設等に勤務する年齢の高い看護職者は看護基礎教育で標準予防策について学んでいないこともあり、標準予防策の重要性についての認識も介護職者のみならず看護職者の中でも異なっている可能性がある。地域においては一人の利用者がデイサービスやショートステイなど複数のサービスを利用している実態があり、感染拡大予防の点からも、また在院日数短縮からくる医療依存度の高い者が地域で療養しサービスを受けている点からも、これらに従事している職員の感染対策は重要となっている。

今後は、地域包括ケアを担う医療従事者だけではなく、介護職者や施設管理者等を対象とした感染対策研修会や、職員への教育・指導にあたる看護職者を対象とした指導方法に関する研修など対象者別の研修について検討する必要があると考える。

Ⅶ. 結 論

地域包括ケアを担う医療従事者を対象に、在宅や診療所、高齢者施設などで発生する感染症の特徴と予防方法をプログラムに取り入れ、感染管理のエキスパート4名の講師による感染症対策研修会を2日間開催した。また、プログラムには、針刺し予防の演習も取り入れた。その結果、対象者の96.6%が研修会が役立ったと回答し、“職場で活かせる”、“感染管理の情報が得られにくいので今回のような研修会を行ってほしい”等の記述があったことから感染予防に対する知識獲得や感染予防上の課題解決に対する本研修会の有効性が示唆された。しかし、看護職者の中には、介護職者の感染予防行動や意識の低さに危機感を示した者もあり、今後は対象者別の研修について検討する必要がある。

本研究はJSPS科研費（挑戦的萌芽研究：JP24660041）の助成を受けて実施した。また、本研究について第30回日本環境感染学会総会・学術集会（2015年）で示説発表した。

謝 辞

本研修会に参加し、調査にご協力くださいました皆様へ感謝を申し上げます。

利益相反

本研究において利益相反に該当する事項はありません。

引用文献

- 福井幸子, 吹田夕起子, 細川満子, 矢野久子, 前田ひとみ (2013). 地域包括ケアを担う医療従事者の針刺しの要因と対策の特徴 看護責任者へのインタビュー調査から. 第33回日本看護科学学会学術集会講演集, 492.
- 前崎繁文, 松本千秋, 山崎勉, 山口敏行, 岡陽子 (2006). 埼玉県下の社会福祉施設および医療施設における感染対策に関するアンケート調査. 環境感染, 21(3), 209-2015.
- 岡本紀子, 松田ひとみ (2010). 高齢者ケアを担う看護者の感染予防に対する意識調査. 日本環境感染学会誌, 25(6), 357-364.
- 境美代子, 長谷奈緒美, 吉井美穂, (2010). 小規模病院, 診療所における感染対策の現状-改正医療法後における感染管理体制の実施調査より-. 日本環境感染学会誌, 25(5), 295-301.

吹田夕起子, 福井幸子, 細川満子, 矢野久子, 前田ひとみ (2013). 高齢者施設における職業感染対策の現状と課題. 第33回日本看護科学学会学術集会講演集, 491.